

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

久保山さんと福竜丸

田 沼 肇

夫愛吉氏亡き後、愛吉氏の遺した「原水爆の被害者は私を最後に」との願いを支えに生きてきた久保山さん。日々は、第五福竜丸被災事件とその後の原水爆禁止運動の歩みと重なっています。原水爆禁止運動や母親運動、第五福竜丸の保存から今日までの平和協会の活動のなかで、皆さんの助けと連帯を忘れることはできません。「ほんとうの母の愛情は、子どもを守ることだけではなく戦争をやめさせることです。戦争による不幸、原子兵器による不幸を、私たちは世界のどここの国よりも早く体験いたしました。この戦争をやめさせることが、子どもたちを幸福にする道です。戦争をやめてください。原子兵器をやめてください。」一九五五年六月の第二回日本母親大会でこう訴えたすずさんは、八月の第一回原水爆禁止世界大会では「広島、長崎のみならず、原水爆反対のためのみなさん方のたたかいのなかに私を加えてください」と発言しました。今年二月、すずさんは一九九三年

の三・一ピキニデー集会への「おことづて」で「私たち家族と同様に核兵器(実験)の被害を受けてつらい人生を生きて来られた太平洋の島やアメリカ、旧ソ連のヒバクシャの代表」への連帯の気持ちのべながら「昨年、皆様により『原水爆の被害者は私を最後に』という夫・愛吉の悲願が達成される日私が生きていくうちに——そんなふうには想えるときが来ましたが——と申し上げましたが、今年、核兵器廃絶が早い、私の死ぬのが早い、競争しているような感じがします」「ヒバクシャとその遺族が生き残っているうちに一発残さず核兵器をなくしてください。お励まし、本当にありがとうございます」と結んでいました。彼女は、思いもかけぬ非道な「事件」で夫を奪われ、悲しみのぬぐいようもないままに、冷酷な政治とこころない世間の目にさらされるような日々を生きていくことを強いられました。日本のどこにでもいるふつうの主婦が選んだ道は、夫愛吉の遺志を多くの人に伝え貫

くことを自分の仕事だといきかせ、その願いをひろげること、同じ目的をもつ人びとと連帯する道でした。みずからの苦しみを克服するために社会全体のことを考えることが必要だと感じてこの選択に、すずさんは自分の日常を重ねたのです。深い感銘を覚え、すずさんの歩みからわたしたちはおおくのことを学ばなければならぬと思います。すずさんが残したさまざまな平和集会での発言や手記のそれぞれは、核時代に生きたひとりの女性の生き方と成長の記録として、ながく人びとをばけましつづけるにちがいありません。一九七七年の九月、すずさんは、長女のみや子さん夫妻やお孫さんたちとともに第五福竜丸展示館を訪れ、故田重道専務理事の案内で船内をくまなくみて歩きました。「感慨おかげに立ち去りたい風情であった」と当時の平和協会ニュースはつたえています。すずさんの再会の訪れは不可能になりましたが、愛吉氏が丹精し、すずさんが育ててきたバラの苗木が近く、第五福竜丸展示館前庭の「久保山愛吉碑」のそばに植えられることになっています。(第五福竜丸平和協会理事)



『まちんと』を山形弁で語る女優松尾敦子さん(左)、川島保徳さん(右)。平和を語る第五福竜丸の集い

久保山愛吉さんが亡くなって三十九周年の九月二十三日、焼津の墓前では、地元実行委員会主催で「墓参の誓い」や集会がもたれましたが、秋雨煙る夢の島の第五福竜丸展示館でも、一日中多彩に集いがひらかれました。紙芝居に朗読に昨年初めて開かれた「平和を語る第五福竜丸の集い」(第五福竜丸で平和を語る会主催)も二回目とあって、午前の部・午後の部と二度の開催。船首左舷の下に特設された舞台で、それぞれ一時間余、つきつきに紙芝居、語り、朗読、絵本の読み聞かせが演じられました。出演者も日本子どもを守る会の中村博さん、日本民話の会の望月新三郎さん、協会評議員の堀田てる子さんほか多士済済。民話の語り部として全国を歩いている江東区の川島保徳さんの独特の口調による民話「関取り」、自作自演の渡辺亮子さんの紙芝居「コスモス」などに参加者は笑ったり、目を押しさえたりしつつ平和の大切さを心に刻みました。雨のなか、来館する家族連れの人びともつきつきに輪のなかに加わり用意した椅子も足りなくなるほどでした。核兵器廃絶、被爆者援護法を平和を語る会午前の集いと同時刻、大きな船がせりだす船尾右舷の床一面にシートをひいて東京原水協主催の「九・二三第五福竜丸のつどい」がひらかれました。都内各地で核兵器廃絶、被爆者援護法制定めざし活動している人びとおよそ八〇名が参加。気象学者増田善信さんが「ピキニ被災当時の放射能汚染」と題し一時間余講演、



9・23第五福竜丸のつどい

七二歳でした。十五日、焼津市浜当目の斎場でおこなわれた葬儀には協会から川崎昭一郎会長が参列しました。第五福竜丸保存に力を尽くした元江東区の先生青木佳子さんが「廃船から展示館建設まで」の報告をし感銘を与えました。核軍縮、核拡散問題で学習平和を語る会午後の集いと重なるように、竜骨を隔てた船首右舷の机の周りでは三〇名近い青年たちが「久保山愛吉氏を追悼する集い」(平和と軍縮をめざす全国連絡会主催)をひらきました。協会理事の服部 学氏が最近の核問題、とりわけ核軍縮、核拡散の現状を中心に講演、本多喜美副会長、第五福竜丸乗組員の大石又七さんも参加し、ピキニ事件四十年年にむけての運動について語り合いました。はじめて第五福竜丸を見るときは、青年もあって、「船腹の下」の学習会には心残り



久保山愛吉氏を追悼する集い

た」と感想をのべあっていました。すずさんを偲んで句会久保山忌句会(新俳句人連盟など実行委員会主催)はもう十三回目。午前早くから船の周囲を巡って句作にはげみ、風に押し倒されたコスモスにも句題を探り、雨に濡れる久保山愛吉記念碑に花束を捧げ、傘をさしつつ、すずさんの生涯の願いに耳を傾け、午後は句会、夜は合評・懇親会と全一日の行動でした。すずさんの生涯柘榴は雨衝く紅傘で聴くすずさんのこと 森 洋野の花のその死の重さ碑が濡れて 石川貞夫 田中智恵子 久保山すず逝き江戸前の鶯さわぐ 徳富桑園

協会理事会を開く
九月二十九日、学士会館で協会の第一一四回理事会がひらかれ、当面の活動計画等審議しました。

連載・ヒロシマ・ナガサキ修学旅行を手伝う② 被爆者の痛み、悲しみ、苦しみを 共有できる心こそ

江口 保

広島市の修学旅行で、被爆者の証言を聞いた東京の中学生のお礼の手紙の末尾に、次のような文が書き添えてあった。
「最後に一言言わせてもらおうと、腹が立つ事がありました。お話しはすごく衝撃的でした。でも、日本がした事に一つも触れていませんでした。だからです。アメリカが日本に原爆を落とし、何万人という命を奪ったのは事実です。でも、日本がした南京大虐殺や真珠湾攻撃もまぎれもない事実なのです。相手がした事だけ言うのではなく、日本がした事も認めないと、決して解決はできないと思います。」
広島では、ここ数年、原爆投下は決して偶然的の出来事ではなく、日本の侵略の事実も語らなければ片手落ちであるということ、被爆者の証言の中で、加害の事も話されるようになった。
数年前にも、ある新聞に「語り部を問いつめないで」という見出し

しで、「ある被爆者が、日本の加害責任や民族差別に特に言及しなかったことに、引率の教師の顔が曇り、不満の表情が浮かんだ。」という記事があった。
それはそれで解らないことではないが、修学旅行という限られた時間の中で、まして加害の体験が直接にはない被爆者に、そこまで要求するのはおかしいと思う。まして修学旅行は一応教師の指導の下に行われる行事であり、広島で何を学ばせるのかは、まず教師がはっきりとさせなければならぬ。
広島へ行けば平和についての総てが聞けるとでも思っている教師が余りにも多く、従って生徒達もそれを期待しているのではないだろうか。そのような安易さが、前記のトラブルを惹起するのである。
教師自身が近現代史を含めて、もっとしっかりと教えるべきであるし、必要ならばそれらの専門家から直接聞くようにしたいものだ。

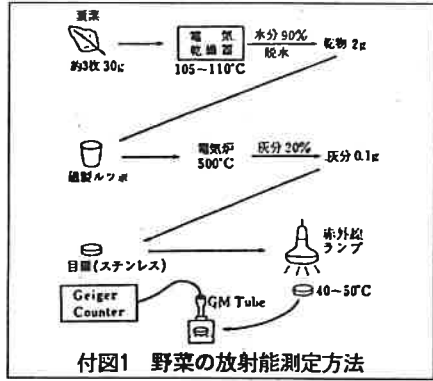
実は、広島でも、いろんな学校の要望に応えて、被爆者が加害などの勉強をされて、話をする傾向にある。従って、とにかく短い証言の時間に、加害や原爆の特性や世界の核状況などの話までに広がり、そのために最も大事な被爆者の証言が短くなってきているのが現状である。これは広島市の修学旅行の本来の趣旨に反した、ゆゆしい問題であると思う。そして、更にこの影響を受けて、私が最も大事にしたいと思う、被爆者の体験だけを切々と語る被爆者が、その場から遠ざけられるような事までが起こっているのである。
私は、これまでも述べてきたように、広島や長崎の修学旅行では、まず何よりも被爆者の体験をもとにした貴重な証言を聞いて欲しいと思っている。その中で、この被爆者の痛み、悲しみ、苦しみを、きちんと自分のものとして受け止めて欲しいのである。これが平和教育の総ての出発点とならなければならぬと思う。加害を学ぶにしても、被害者の痛みや苦しみを共有出来る心がなければ、それは単なる知識でしかない。実は、被爆者の証言を聞くという事は、そ

ここに大きな意味がある。
先日、開かれた或る修学旅行の会合で、事前学習に力点が置かれた発表が多く目についた。広島や長崎の修学旅行を控えての事前学習は又とないチャンスである。しかし、飽くまでも修学旅行の事前の学習であるからには、修学旅行にしっかりと焦点を当てて取り組んで欲しい。加害の話が出てこなかった時に不満が噴出するというのは、先走った事前学習の影響ではないかとさえ思っている。
間もなく被爆五〇年を迎える。被爆者はいよいよ少数なくなり、生きている者も高齢化してきた。一七年前、最初の修学旅行の時に世話になった方からは、既に証言を伺うことが出来なくなってしまう。奥様と五人のお子さんを亡くされ、一人生き残された当時の学校の先生は、八九歳になられたもなお元気に話しておられたが、この春に体調を崩され、生徒達の前から姿を見る事が出来なくなった。ヒロシマ・ナガサキは確実に遠くなりつつある。心に響く広島・長崎の修学旅行を！ 今、是非！
(ヒロシマ・ナガサキの修学旅行を手伝う会) 一了！

連載・フォールアウトと土壌学の出合い フォールアウトとの対面——直接汚染時期

川瀬 金次郎

ちょうど三九年前、一九五四年(昭29)早春にさかのぼる。
前年夏中国満洲から引揚げ、新潟大学に赴任したばかりであった。日本人なら決して忘れ得ない大事件が勃発した。これが生涯のライフワークのキッカケとなり、専攻の土壌学に放射能汚染という新しいジャンルができるとは全く予想できなかった。昭和29年3月16日の読売新聞が焼津からトップニュースの大見出し。



「邦人漁夫ビキニ原爆実験に遭遇。23名が原子病。1名は東大で重症」まさに世紀のスクープ。第五福竜丸の死の灰遭難。のちに久保山愛吉さんが亡くなった。
その逝去は痛ましい限りだった。この水爆実験は広島原爆の約千倍の威力、莫大な「死の灰」(即ちフォールアウト(放射性降下物))が地球上にばらまかれた。その結果、4月14日付新聞は新潟大学の渡辺博信博士が6、10、12日の雨3ℓから100μmの放射能を検出したと報じた。これが日本における最初の放射能雨の検出。続いて各地から多くの測定値が報告された。10月1日渡辺博士から放射能雨による農作物の汚染の研究を依頼され、さらに東大三井進午教授から北陸地方の作物汚染を研究するため、文部省の別枠科学研究費による総合研究班の分担者に依頼され、五万円を支給された。そこで渡辺博士から公衆衛生学教室のガイガーカウンターを借用して、新潟市近

郊の野菜の放射能を測定した。一九五六年春100μmの放射能雨の直後に採取したカブ葉で乾物10g当り100μCi計数した。多くの測定データから放射能雨が100μm前後になると野菜が明らかに汚染すること、ダイコン、ゴボウのように表面に凹凸の多い葉とか、キャベツの越冬展開葉では汚染しやすいこと、水洗で除去される時と除去されない時があることが判った。なお付図1で野菜の放射能測定方法を示したので参照されたい。
さて周知のように作物を栽培する時には必須三要素にN、P、Kがある。このうちKは生育状況とくにK施肥の多少により、野菜のK含量が著しく異なる。天然に存在するKには⁴⁰K、⁴¹K、⁴²Kの同位元素があり、主体は⁴¹Kだが、さらに放射性⁴⁰K(半減期10億年)が0.01%存在し、普通のGMカウンターではK100μCi当り10μm前後計数される。そのため作物のK含量を蛍光光度計で分析し、⁴⁰Kによる放射能を差引かなければならない。

ところが米国の科学者ミラー、ウッドベリー両氏(原子爆弾傷害調査委員会、ABC)が日本の作物汚染に関する報道を批判して曰く、「日本の放射能雨の調査は誇張されている。今騒いでいる野菜の放射能も天然にあるKの放射能によるものである。このような事実を無視している日本の科学者は科学者の名に値しない」。これこそとんでもない誹謗で、日本では必ずKの含量を分析して、相当するβ値を差引いていた。従って農作物の放射能データは極めて正確かつ良心的であった。
なおカリ肥料の効果は⁴⁰Kの放射能によるもので、植物種子の発芽、生育に対する刺激効果、炭水化合物の合成に役立つと言われている。一九五五年(五六年頃)は作物の葉面に付着する直接汚染にすぎず、その程度も軽微であった。核実験も世論のきびしい批判で早晩中止されると楽観し、一研究費の支給期間だけ研究すれば宜しいと甘く考えていた。ところが核大国は五年24回、五六年31回、五七年45回、五八年84回と急速にその回数を増加し、規模を拡大させた。
そのためフォールアウトが土壌層に集積し、経根的に内部吸収する間接汚染という未知の分野の解明が必要となり、研究の長期化を覚悟せざるを得なくなった。
(新潟大学名誉教授・農学博士)